

ドキュメンタリー「疎開した40万冊の図書」 戦禍逃れた“文化の要”

毎日新聞 2014年4月25日 夕刊

第二次世界大戦中、戦禍を逃れるため、東京都立日比谷図書館などの蔵書40万冊が郊外に運び出された。5月10日から大阪・九条のシネ・ヌーヴォで公開される「疎開した40万冊の図書」（1時間42分）は、「本を守った人々」をめぐるドキュメンタリー映画だ。金高謙二監督（58）は「どうしても語り継がなければいけない話だと思った」と持ち出し覚悟で撮影を始めた思いを語る。 【棚部秀行】

本の疎開の中心人物は、司書の中田邦造（1897～1956）。1944年、日比谷図書館の館長に就任すると、蔵書約26万冊の大規模な疎開を検討し、さらに民間人が収集している貴重本の買い上げを進めた。「私はこの仕事のために死んでもよい」との中田の言葉が紹介される。計40万冊の書籍は、現在の東京都あきる野市、埼玉県志木市の民家の土蔵などに運び込まれ、焼失・散逸を逃れた。東洋思想の和漢書や江戸の古文書、書誌学書、浮世絵、掛け軸など、後世に残すべき貴重な文化財が守られた。日本各地でも同様の「疎開」は実施されたが、これほど大規模な例はないという。

勤労学徒として東京郊外まで本を運んだ男性は「ずだ袋に10キロくらい本を入れて担いだ」「運ぶ手段は電車や車、大八車。大人になって、非常に貴重なものだ実感した」などと証言する。土蔵を提供した人々の言葉も生々しく、人命が脅かされる戦時中、文化財保護に尽力した人々の姿がよみがえる。「本が人々の知性を高め、国家の力になる」という作家、阿刀田高らのコメントも重い。現代の図書にまつわる逸話として、東日本大震災の被災地・福島県飯館村の図書館の例も映し出される。

「本は文化の要だと思います。はるか昔の人の言葉がDNAのようにつながっている。それは明らかに人の歴史だと思います」と監督は語る。一方で「国は皇民化政策の際、拠点となる図書館の蔵書を守ろうとしたのかもしれませんが」とも付け加えた。本の疎開の費用は、都の疎開事業の予算から拠出されている。

映画製作のきっかけは、4年ほど前、車の運転中にFMラジオで「40万冊の疎開」を知ったことだった。「なぜこんなに素晴らしい話が世に出ていないのか不思議に思った。誰もやらないんだったら、自分が世に残さないといけないんじゃないか」と自主製作で撮影を始めたという

ナレーションは俳優の長塚京三が務める。疎開した本の多くは現在、都立中央図書館（東京都港区）、日比谷図書文化館（元日比谷図書館）に収められており、実際に閲覧することができる。